

道徳科の趣旨を踏まえた授業づくり

香川大学大学院教育学研究科 植田和也

はじめに

- 「広島版『学びの変革』アクション・プラン」・・・主体的な学び
- 「何を知っているか」・・・「知識を活用し、協働して新たな価値を生み出せるか」
- 「学習者自らが能動的に学びを展開する、学習者基点の、深い学び」

推進リーダー教師、推進校担当者の皆さんへの期待

- 道徳科の授業・・・授業を観て分析する力 授業者を成長させる力 授業をみせる力
- 道徳教育・・・学校経営における道徳教育の視点 コーディネートの視点 情報伝達の視点
- 人間としての倫理観・・・道徳の意義 人間として生きること・人生の意味 社会のモラル

1. 今までの道徳の時間の特質を確認

- ◎道徳的価値の自覚及び自己の生き方についての考えを深める

① 道徳的価値の理解を深める

- 1) 価値理解 ・・・ ねらいとする道徳的価値が大切であること
- 2) 人間理解 ・・・ 大切ではあるが、道徳的価値に根ざした行為は安易ではないこと
- 3) 他者理解 ・・・ 道徳的価値にかかわる感じ方・考え方は人によって様々であること

② 自分とのかかわりで考える（自己理解を深める、自己の生き方について考えを深める）

- ・道徳的価値にかかわる諸事象について、自分とのかかわりを実感しながら学ぶ。
- ※ 諸問題を自分事としてとらえ、自分の体験などに基づいて考えられるようにする。
- ③ 道徳的価値を自分なりに発展させていく・・・自分自身を振り返る
- ・ねらいとする道徳的価値にかかわる行為、考え方、感じ方を具体的に振り返る。
- ※ どのような観点で振り返りをさせるのかを明確にする。（間接経験、直接経験）
- ・自己や社会の未来に夢や希望をもてるように

2. 授業づくりにおいて

中教審答申(H26.10) 道徳の授業に関して、「読み物の登場人物の心理理解のみに偏った形式的な指導や、分かりきったことを言わせたり書かせたりする授業がみられる」との指摘

① 教え込み、押し付けにならないために

そうならないために、何を大切にしたいですか？

② 道徳授業の要といえる教材（資料）分析、吟味をしっかりと

- 第5章 道徳の時間の指導 p79-p98 確実に読みこなす（新道徳科の指導 p75-p98）
- ・中心場面、中心となる内容項目（中心価値と関連価値について）
- ・あらすじや登場人物の心情の変容だけでなく、主人公の道徳的変容、道徳的問題や人間としての弱さや醜さも含めた人間を読む
- ・多様な教材（資料）と提示の工夫 教材（資料）との出あわせ方

③ 教材（資料）分析・価値分析を生かした授業の工夫

☆ 道徳的価値について考える ・・・ 主人が価値の自覚をする場面（どこに時間をかけるか）

- ・自覚したのは誰か ⇒ 主人公
- ・自覚した出来事は何か ⇒ 中心価値
- ・自覚したのはいつか ⇒ 中心場面 ・・・ 主人がはっとした場面 【中心発問】
- ・自覚した後どうしたか

※ 主人の心理状況を読むだけで終わらない。例）「このときの主人公の気持ちは？」だけで

※ 「自覚した時」に子どもたちから多様な考えを出させる ⇒ 教師が正解をもって授業をしない

3. 発問の重要性・・・何に注意しながら発問を考えるのか：基本的事項として

① 発問の吟味 中心発問 基本発問 補助発問

児童の立場や姿から

？問い合わせが分かり切った気持ちばかりで感じ考えたりする意欲がわからないことはないか

？問い合わせが複雑すぎないか、状況や関係が複雑すぎる場合（人間関係をまず図式化）

？何を聞いているのか明確になっているか 考える際の条件、時間的な枠組

例・ある場面での気持ち（絵、段落、転）・・・をしているときの〇〇はどんな気持ちで～
・一瞬の～の時の気持ち（道徳的変容の瞬間）ハッとした〇〇は何を考えたのでしょうか
その時、何に気付いたのでしょうか。

・A場面からB場面への変容 〇〇の気持ちはどうして～になってきたのでしょうか
状況の変化があり、行為の変化があり そうさせた理由（心情の変化）を探る

授業づくりに励む教師の立場から

- ・中心となる発問の十分な吟味・・・資料のどこが山場で、どの場面を生かしてどういう発問なのか。
- ・どのように子どもたちが自分とのかかわりで価値に気づいたり、自覚したりしてほしいと願うのか、そのための発問になっているのか。
- ・本当にねらいや道徳的価値に迫る発問になっているのか。

「中学校学習指導要領解説 特別の教科 道徳編」（強調は筆者による）。

イ 発問の工夫

教師による発問は、生徒が自分との関わりで道徳的価値を理解したり、自己を見つめたり、物事を多面的・多角的に考えたりするための思考や話合いを深める上で重要な鍵になる。発問によって生徒の問題意識や疑問などが生み出され、多様な感じ方や考え方が引き出される。そのためにも、生徒の思考を予想し、それに沿った発問や、考える必然性、切実感のある発問、自由な思考を促す発問、物事を多面的・多角的に考えたりする発問などを心掛けることが大切である。

発問を構成する場合には、授業のねらいに深く関わる中心的な発問をまず考え、次にそれを生かすためにその前後の発問を考え、全体を一体的に捉えるようにするという手順が有効な場合が多い。（中学校学習指導要領解説 特別の教科 道徳編 p.81）

是非、確認するとともに、具体的な読み物資料等において吟味を。

例えば、「多面的・多角的に考える」ことが、様々な場で用いられているが児童生徒にとって、具体的にどのような発問で、どのような活動を通して、多面的・多角的に考えることになるのか検討してほしい。

○発問の工夫 発問：児童の思考や話合いを深める重要な鍵 新 P81

- ・考える必然性や切実感のある発問
- ・自由な思考を促す発問

- ・物事を多面的・多角的に考えたりする発問（道徳的価値について深く思考させる発問）

4 中心発問に係る補助発問の重要性

- ・問い合わせ
- ・問い合わせ
- ・切り返し発問
- ・搔さぶり発問

○ ねらいとなる中心価値の深い追求をねらって

例えば、子どもが、思いやり、礼儀、友情などの価値を示す文言を発言
他の児童にもその本質や具体的なイメージとして気付くことができるよう…
例：〇〇さんが言った「思いやり」ってどんなことかな。
みんなは分かったの、この場合の友情ってどういうことなの。もう少し話してよ…。

○ 条件変更でより広く考えさせる場合

例：もし、友達でなければ、どうだろうか…。
もし、誰にも見つかっていないれば、迷惑をかけていないよ。それでも…かな。

○ 価値内容の比較や対立を検討させながら、ねらいをより追求する場合

例：～するとしても、それでも…は本当に大切と言えるのかな。
～の場合は、～も大切だよね。そのことを考えると、Aが…することはどう思うか。

○ 仮説により未来を想定し

例：もし、このままで…なら、その後、そのことを知ったAはBのことをどう思うだろうか。

5. 話し合い活動・交流を工夫してみよう

- ・多様な学習活動 交流の形式 書く活動の工夫 ディベッショントピック
- ・机の配置やグループの活用
- ・活動に応じて変化

(1) 言葉と心の交流（学び合い）をめざして ～考え方を深めていく過程を大切にした学び方～
「人とかかわる」ことで友だちのよさを学び、自分の考え方や感じ方のよさにも気づく。

具体的に活動として（できればその学年の子どもたちにも分かる言葉で活動にネーミングを）

- ・ こうかん よさみつけ…
- ・ すいせん よさの紹介…
- ・ 自分と比べ カード書き…
- ・ なかま分け、キーワードでまとめ…
- ・ 自分の心のつながり図…
- ・ ○感 ふりかえり…

（教科や本時のねらいで学び合いをどの程度、時間的に確保できるのかによる違いはあります）

大切にしたい5つの視点

- ① 自分の考え方をもつ
自分の感想や考え方をもたないで話し合いや交流をしようとしても成立しないであろう。
- ② 相手を意識して自分の考え方伝えようと心がける
自分の考え方を他人に聞いてもらおうとする過程に、自分の考え方を見つめ直したり、責任を感じたりすることが起きてくるであろう。
- ③ 相手の考え方をしっかりと聞き、自分の考え方と比べてみる
自分の考え方と比べながら聞くことで、自分に足りなかった考え方や自分とは異なるものの見方に気づきがあってを学ぼうとする思考や意欲が生まれてくるであろう。
- ④ 相手の話を受けて、より高まった考え方を表現する
相手を受容しながら、自分の考え方を出し合うことで、より高まった考え方につき、新たな価値ある考え方を創造することができるであろう。
- ⑤ 相手や自分のよさを認め合う
話し合いや交流によって「分かってもらってよかった」「自分とは違うけどなるほどと思った」というような充実感や満足感を感じながら、相手や自分のよさに気づいていくであろう。

確かな自信を育む道徳授業-新教育課程の構想と実践-「総合的学習と連携を図る道徳学習」

(2) 深まる話し合いの工夫

☆ 学年や内容に応じて、話し合いの前には準備（書く活動）が必要。書いたものをもとに話をさせる。

※ 子どもが書きやすい場面を選択（ねらいや実態から判断）

- ・ 道徳的価値を深める効果（自己の生き方を見つめる）
- ・ 「書く」を通して、自分の思いをまとめ、明確化する。→振り返り、考えの根拠や理由
- ・ 「書いた」ものを交流することによって、道徳的価値を広げる。キーワードに線をひく。

☆ 話し合う視点や条件を明確にする…発問にも関係

☆ 話し合った後の全体への広げ方の工夫

(3) 道徳的価値の自覚を深めるための手立て

- ・ 役割演技 … 登場人物の思いを、表情や身振り・言語など感性を働かせて自分の考えで表現する。
- ・ 役割書簡法（ロールレタリング） … 相手の立場から自分へ手紙を書き、違う視点から自分を見つめる。
- ・ 心情円盤 … 自分の葛藤を認知性のあるもの（円盤の色）で表し、自分の心情を言葉で補って表現する。
- ・ 交流 … 言語だけの交流ではなく、カード等に書くことにより、その人の考えを引き出すことができる。
- ・ ポートフォリオ … 体験や実生活での思いを記録しておき、自分自身の振り返りに用いる。

話し合いたい、友達はどう考えているのかな？と感じたり、思ったりするために

簡単にできることから取組り組み、自分のクラスに合うようにアレンジしていく

・比べる 視覚的情報

・立場を明確にする その上で理由や考えを発言

少し違うようだ その違いは何なのか。

同じ立場を選択したのに、理由が違うようだ…。本当にそうなのかな、

6. 多様な学び方を考える

(1) 学年や発達に応じて、子どもに任せることができることはないか 子どもの選択

人物選択 場面選択 資料選択

(2) 道徳ノートを生かした学び

評価への活用、指導の改善に生かす、児童生徒の理解促進等

○子どもにとって

自らの成長や課題をつけ、自己を振り返り見つめる手助け。自分の考え方や理由を書いたり、友達の多様な考え方につれたりしながら、自分の考え方をより深めていくことが大切な役割。

○教師にとって

指導の改善や自らの授業評価の参考。児童生徒の道徳性の発達を見取り、評価に生かすためには、心の変容や成長の様子を継続的に見ていく必要。思いがけない考え方や良さを道徳ノートから見つけることも。複数時間の指導、同じ内容項目でも資料が違った場合の感じ方の違いを比較する際にも有効に活用。

授業前に書かせたことを導入等で活用することも。各学期の節目には、心に残った資料や忘れられない道徳の時間について、ノートを振り返りながらアンケートをする等、学期や年間を通して振り返る際にも活用。

○保護者にとって

家庭や地域との連携、ノートや「私たちの道徳」を通して保護者が子どもと共に成長する媒体。道徳ノートに一言書くことの難しさを通して、保護者が考えるよい機会と。子どもの考え方や思考について知るとともに、保護者自身も成長する場。「共に育て育み、共に学び、共に成長する」

○ 道徳教育としてのノート

道徳の時間での記述以外にも、他領域との関連において道徳ノートを活用したり、学級経営や自分のめあてとの関連を生かした内容を記述したりする事例も多く見られる。

(3) TTのよさを生かす

(4) 道徳科に生かす指導方法の工夫

道徳科に生かす指導方法には多様なものがある。ねらいを達成するには、児童の感性や知的な興味などに訴え、児童が問題意識をもち、主体的に考え、話し合いうことができるよう、ねらい、児童の実態、教材や学習指導過程などに応じて、最も適切な指導方法を選択し、工夫して生かしていくことが必要である。

そのためには、教師自らが多様な指導方法を理解したり、コンピュータを含む多様な機器の活用方法などを身に付けたりしておくとともに、児童の発達の段階などを捉え、指導方法を吟味した上で生かすことが重要である。

○ 指導方法の工夫の例としては、次のようなものが挙げられる。

ア 教材を提示する工夫

教材を提示する方法としては、読み物教材の場合、教師による読み聞かせが一般に行われている。その際、例えば、絵芝居の形で提示したり、絵本、人形やペーパーサポートなどを生かして劇のように提示したり、音声や音楽の効果を生かしたりする工夫などが挙げられる。また、ビオラなどの映像も、提示する内容を事前に吟味した上で生かすことによって効果が高められる。

なお、多くの情報を提示することで必ずしも効果的だとは言えず、精選した情報の提示が想像を膨らませ、思考を深める上で効果的な場合もあることに留意する。

イ 発問の工夫

教師による発問は、児童が自分との関わりで道徳的価値を理解したり、自己を見つめたり、物事を多面的・多角的に考えたりするための思考や話合いを深める上で重要な役割を果たす。考え方を出し合う、まとめる、比較するなどの目的に応じて効果的に話合いが行われるよう工夫する。座席の配置を工夫したり、対話形式で進めたり、ペアでの対話やグループによる話し合いを取り入れたりするなどの工夫も望まれる。

○ ウ 話合いの工夫

話合いは、児童相互の考え方を深める中心的な学習活動であり、道徳科においても重要な役割を果たす。考え方を出し合う、まとめる、比較するなどの目的に応じて効果的に話合いが行われるよう工夫する。座席の配置を工夫したり、対話形式で進めたり、ペアでの対話やグループによる話し合いを取り入れたりするなどの工夫も望まれる。

エ 動く活動の工夫

働く活動は、児童が自ら考えを深めたり、整理したりする機会として、重要な役割をもつ。この活動は必要な時間を確保することで、児童が自分自身とじっくりと向き合うことができる。また、学習の個別化を図り、児童の考え方や感じ方を捉え、個別指導を行う重要な機会にもなる。さらに、一冊のノートなどを活用することによって、児童の学習を継続的に深めていくことができ、児童の成長の記録として活用したり、評価に生かしたりすることもできる。

オ 動作化、役割演技など表現活動の工夫

児童が表現する活動の方法としては、発表したり書いたりすることのほかに、児童に特定の役割を与えて即興的に演技する役割演技の工夫、動きや音楽を模倣して理解を深める動作化の工夫、音楽、所作、その場に応じた身のこなし、表情などで自分の考え方を表現する工夫などがよく試みられる。また、実際の場面の追体験や道徳的行為などをしてみることも方法として考えられる。

カ 板書を生かす工夫

道徳科では黒板を生かして話合いを行うことが多いが、板書は児童にとって思考を深める重要な手掛かりとなり、教師の伝えたい内容を示したり、学習の順序や構造を示したりするなど、多様な機能をもっている。

板書の機能を生かすために重要なことは、思考の流れや順序を示すような順接的な板書だけでなく、教師が明確な意図をもつて対比的、構造的に示したり、中心部分を浮き立たせたりするなどの工夫である。

キ 説話の工夫

説話とは、教師の体験や願い、様々な事象についての所感などを語ったり、日常の生活問題、新聞、雑誌、テレビなどで取り上げられた問題などを盛り込んだりする学習を工夫することも多い。教師が明確な意図をもつて話をしており、児童がねらいの根柢にある道徳的価値をより身近に考えられるようになるのである。教師が意図をもってまとまった話をすることは、児童が思考を一層深めたり、考え方を整理したりするのに効果的である。

○ ウ 教師が自らを語ることによって児童との信頼関係が増すとともに、教師の人間性が表れる説話は、児童の心情に訴え、深い感觸を与えることができる。なお、児童への叱責、罰戒や行為、考え方の押し付けにならないよう注意する必要がある。

3. 児童が主体的に道徳性を養うための指導

(「第3章 特別の教科 道徳」の「第3 指導計画の作成と内審の取扱い」の2)

(3) 児童が自ら道徳性を養う中で、自らを振り返って成長を実感したり、これから他の課題や目標を見付けたりするための思考や課題追究へへの意の課題や目標を見付けたりすることができるよう工夫する。その際に、道徳性を養うことの意義について、児童自らが考え、理解し、主体的に学習に取り組むことができるようになる。

道徳教育の本来の使命に鑑みれば、特定の価値観を押し付けたり、主体性をもたらす言われるままに行動するようになります。道徳教育が目指す方向の対極にあるものと言わなければならない。

むしろ、多様な価値観の、時に対立がある場合を含めて、人間としてよく生きるために道徳的価値に向き合い、いかに生きるべきかを自ら考え続ける姿勢こそ道徳教育が求めるものと言える。

(1) 自らの成長を見付けたりする

授業では、学習の始めに児童自らが学びたいという課題意識や課題追究への意欲を高め、学習の見通しなどをもたらせることが大切である。道徳科においても、それを踏まえ、教材や児童の生活体験などを生かしながら、一定の道徳的価値に關わる物事を多面的・多角的に捉えることができるようになる。さらに、理解した道徳的価値から自分の生活を振り返り、自らの成長を見付けたり、これから他の課題や目標を見付けたりすることが望まれる。

そのため、道徳的価値や児童自身の生活について多様な視点から捉え直し、自分が納得できる考え方を導き出す上で効果的な教材を選択したり、その教材の特質をつかすことでも、一人一人が意欲的に主張的に取り組むことができるような工夫を行なう。また、教材を仕組んだり、学んだ道徳的価値に照らして、自らの生活や考え方を話合い活動を工夫したりする必要である。さら見つめるための具体的な振り返り活動を工夫したりする必要である。

それに応じて、授業開始時と終了時ににおける考え方がどのように変わったのかが分かるよう活動を工夫する必要がある。

また、特定の価値観の押し付けにならないよう、学年段階に応じて、道徳科における主体的かつ効果的な学び方を児童自らが考えることができるような工夫をすることが大切である。そして、児童の発達の段階に応じて、児童自らが道徳的価値を実現するための課題や目標、及び道徳性を養うことのよさや意義について考えることができるよう指導を工夫することも大切である。

なお、年度当初に、道徳科の学習全体を見通し、学年始めの自分の有様やこれまでからの自らの課題や目標を捉えるための学習を行うことでも効果的である。そして、その望ましい自分の在り方を求めて、年度途中や年度末に、それまでの学習や自分自身を適宜振り返ることで、自らの道徳的な成長を実感したり、新たな課題や目標をもつたりする学習を工夫する。そのことによって、道徳的価値やや自らの生き方に引き続き考え方を継続する態度を養い、一層長い期間の中で、主張的に生き方を学ぶ道徳科の学習とすることができる。

そのためにも、教師自らが児童と共に自らの道徳性を養い、よりよく生きようという姿勢を大切にし、日々の授業づくりや愛情をもった児童への指導をすることが重要となる。

(2) 道徳科における児童の主体的な学習

学校教育は、関係法令及び学習指導要領に基づいて編成された教育課程を実施することが求められており、年間指導計画等にしたがつて全ての教師が意図的に主張性をもたず言われるままに行動するよう指導したりすることは、指導内容を單に児童に計画的に指導することではない。指導内容を児童が自分との関わりで捉え、切実感をもつて学習することではない。児童が自分とつながるものである。そのためには、児童の主体的な学びが必要になる。学習指導においては、児童自らが主体的に学ぶための教師の創意工夫が求められる。

道徳科の授業では、教師が特定の価値観を児童に押し付けたり、児童が指示通りに主張性をもたず言われるままに行動するよう指導したりすることは、指導内容を單に児童の対象にあるものである。また、多様な価値観の、時に対立がある場合を含めて、人間としてよく生きるために道徳的価値に向き合い、いかに生きようべき姿勢が求められるのである。

このようないふところから、道徳的価値の理解を基に自己を見つめるなどの授業を行なった場合には、児童が道徳的価値を自分との関わりで捉え、自らの将来に進んで生かそうとする姿勢をもてるよう、主張的な学習にすることができるようになる。そのため、児童が道徳的価値について主張的に考えることができるよう問題解決的な学習や体験的な学習を取り入れるなど、教材に応じて効果的な学習を設定することが必要である。

4 多様な考え方を生かすための言語活動

- (「第3章 特別の教科 道徳」の「第3 指導計画の作成と内容の取扱い」の2)
 (4) 児童が多様な感じ方や考え方に対する中で、考えを深め、判断し、表現する力などを育むことができるよう、自分の考えを基に話し合ったり書いたりするなどの言語活動を充実すること。

学校の教育活動全体で言葉を生かした教育の充実が求められている。言葉は、知的活動だけでなく、コミュニケーションや感性、情緒の基礎である。道徳科においても、その言葉を生かした教育についての充実が図られなければならない。

(1) 道徳科における言葉

道徳科において行われる道徳的価値についての理解を基に、自己を見つめ、物事を多面的・多角的に考え、自己的生き方にについての考えを深める学習では、道徳的価値を含んだ教材を基に、児童が自分の体験や考え方、感じ方を交えながら話合いを深める学習活動を行うことが多い。その意味からも、道徳科における言葉の役割は極めて大きいと言える。
 国語科では言葉に關わる基本的な能力が培われるが、道徳科は、このような能力を基本に、教材や体験などから考えたこと、感じたことをまとめ、発表し合ったり、話合いなどにより異なる考え方、感じ方に接し、協同的に議論したりする。例えば、教材の内容や登場人物の気持ちや行為の動機などを自分との関わりで考える。友達の考えを聞いたり、自分の考えを伝えたり、話し合ったり、書いたりする。さらに、学校内外での様々な体験を通して考え、感じたことを、道徳科の学習で言葉を用いて表現する。これらの中で、言葉の能力が生かされるとともに、道徳的価値の理解などが一層効果的に図られていく。

したがって、道徳科においては、このような言語活動を生かして学習を展開することが、児童自身が考えを深め、判断し、表現する力を育む上で極めて重要であると考えられる。

- (2) 自分の考え方を基に表現する機会の充実
 道徳科の生かす言語活動
 (3) 道徳的価値の理解に基づいて自己を見つめ、自己の生き方にについての考えを深める機会から、話し合う活動や書く活動など児童一人一人の考え方や感じ方を表現する機会を充実し、自らの道徳的な成長を実感できるようにすることが大切である。
 ア 児童が問題意識をもち、意欲的に考え、主体的に話し合うことができるよう、ねらい、児童の実態、教材や学習指導過程などに応じて、考問、話合い、書く活動、表現活動などを工夫する。
 イ 教材や体験などから感じたこと、考えたことをまとめ、発表し合ったり、話合いなどにより異なる考え方接し、多面的・多角的に考え、協同的に議論したりするなどの工夫をする。
 ウ 道徳的価値に關わる様々な立場について議論を行い、自分との関わりで考究できるような工夫をする。

小6 めたしのいく道 資料 学校の本 香川県立小学校研究会 126

3 本時の学習

- (1) ねらい
 学校の中庭を作った大西行礼さんの考え方や、その中庭を守り続ける地域の人たちに感謝し、地域に役立つことをしようとする意欲を高める。
- (2) 学習指導過程

学習活動	子供の意識の流れ	教師の支援・援助活動
1 「心のノート」を見て、感謝の心について考える。	ふだんの生活は多くの人に支えられているな。 支えてくれている人の心について考えよう。	心のノートの「『ありがとうございます』って言えますか?」を見て、感謝の心についての関心を高める。
2 本文をしっかりと読み、交流する。	大好きな中庭の秘密を聞いた千秋の気持ちを考えよう。	千秋の気持ちを考えやすいうように場面絵を提示し、その時の気持ちを探りながら進める。
(1) 自分が考えたい場面を選び、千秋の気持ちをカードに書く。	本文を読み、カードに千秋の気持ちを書こう。	発 大好きな中庭の秘密をいた千秋の気持ちを考えよう。
(2) 同じ場面を選んだ友達と千秋の気持ちについて話し合い、気持ちを膨らませる。	校長先生の話から 大西さんはすごい。子どもたちのために小学校や中庭を作るなんて。	その時の千秋の気持ちを想像してカードにしっかりと書き込むよう助言する。
(3) 違う場面を選んだ友達と交流して考えを深める。	青井さんの話から 青井さんは大西さんの思いを受け継いで木をずっと守っているのがすごい。	同じ場面を選んだ友達同士で交流し、カードに考を付け加えさせていく。
(4) 道徳ノートに書き話を書く。	自分の土地を減らしても地域の教育力のことを考えるという心がすごい。	違う場面を選んだ友達と交流して互いのよさを認め合ったり、つないで考えたりするように助言する。
3 心のノートと一緒にまとめてみよう。	20年も続けてボランティアで子どもたちのために木の手入れをしてきたのが素晴らしい。	続き話を書くことで、価値を見つけ、価値を深めていくけるようにする。
	中庭は多くの人に支えられ、守られてきた。そのことに感謝して、これからも守っていかなければ。	身近な生活の中にも自分たちを支えてくれている人がいることを伝え、自分には何ができるかを考えさせる。
	千秋は、大好きな中庭を守ってくれた人たちに感謝しながら、一生懸命掃除をしています…	
	地域のために自分ができることをやってみよう。	

- (3) 評価
 道徳ノートに書き話を書くことによって、生活を支えてくれた人たちに尊敬や感謝の気持ちをもち、地域のために役立つことを心のノートの「『ありがとうございます』って言えますか?」に書くことができたか。

第3章 副校長・教頭、道徳教育推進教師の果たすべき役割と期待

例えば、学校全体で「情報モラルを育む教育」を重点として道徳教育に取り組むなら、それを具現化するために、できうこと、やってみようと思うことを先に示した手順のような過程で多くあげ提案・整理することからである。もし、自校が「生命を大切にする教育」を核に取り組むのであれば、図書室、学級文庫、掲示板、学校便り等に「いのち」に関わるコーナー等も考えられる。「いじめ防止となかまづくり」、「ふるさとを愛する教育」など、各校において重点とする内容や関連する価値内容も違ってくるだろう。できることを全教職員で知恵を出し合い、全教育活動で取り組むことである。実は、これらの個々の活動は、多くの学校において既に取り組まれているのではないだろうか。そうであれば、是非それらの取組を、前述のような手順や視点から再確認して、全教育活動の道徳教育として意識したり共通理解したりしてほしい。また、道徳教育推進教師にとっての重要な課題として、宮脇(2015、26頁)は、話し合いの場(時間、場所)を挙げている。そのことが推進体制の場づくりで重要であると指摘している。

表1 自校でできうことの具体的なイメージ例「情報モラルを育む教育」

担当(連携、分担)	できそうな活動内容例
道徳教育推進教師、研究主任(現職教育主任)	情報モラルの捉え方や研究主題のキーワードの共通理解(学年により何を重点にするのか低中高で) 例:3年計画でまず1年目に重点とする柱 → 実践の検証やアンケート → 保護者啓発等
図書館や国語担当、司書教諭、ボランティア	図書室、学級文庫等で「情報モラル」に関わる図書・雑誌コーナーの整備、例:ネットいじめ等に関する図書の検索、回覧
掲示担当や掲示委員会の子ども等を中心	校内掲示で情報モラルを大切にする意識の継続となる環境の形成や視覚化の工夫(写真、絵画、言葉等) 例:情報モラルを啓発するメッセージ等を子どもや教職員に募集 → 活用して啓発、紹介や掲示
道徳担当や推進教師を中心に	各副読本、県センターHP等での事例紹介等より「情報モラルに関わる」多様な資料や実践例の収集や整備、紹介 道徳科の内容項目の確認や全体指導計画等への位置づけ
音楽担当を中心	モラル形成に適切な歌、校内に流れる音楽や音楽会での曲の選定(情報モラルを支える価値に関する歌詞や子どもたちの自作曲)
メディア教育・情報教育担当を中心	情報モラルに関わる映像番組等(NHK「いじめをノックアウト」等でのネットいじめ)の情報の提供や活用提案 HP等で学校の重点を発信、
生徒指導担当、養護	児童生徒の命に関わる危険な行為や安全面での話 例:ネットいじめ、ネット依存症、睡眠不足と心や脳の関係
各担任、学年主任、管理職等で分担	PTAの会合等での重点内容の紹介、学校の重点活動や内容を継続的に情報発信 ○○だより家庭と連携して「モラル標語カレンダー」、「情報モラル週間」などの意識啓発活動
学年主任、推進教師、管理職	情報モラルに関する専門家(外部講師)と連絡調整 例:出前授業等への協力依頼、講演会や啓発活動の実施
管理職・事務さんとの協力で	情報モラルやネットいじめ等に関する新聞記事や情報の整理、回覧

II 副校長・教頭、道徳教育推進教師ができること

員で知恵を出し合い、全教育活動で取り組むことである。実は、これらの個々の活動は、多くの学校において既に取り組まれているのではないだろうか。そうであれば、是非それらの取組を、前述のような手順や視点から再確認して、全教育活動の道徳教育として意識したり共通理解したりしてほしい。また、道徳教育推進教師にとっての重要な課題として、宮脇(2015、26頁)は、話し合いの場(時間、場所)を挙げている。そのことが推進体制の場づくりで重要であると指摘している。

表2 道徳教育推進のための話し合いの例(宮脇2015をもとに一部改正)

過程	内容 できること、すべきこと
方向付け 現状把握	議題を確認する。現状を客観的に洗い出す。気づきを発表する。(会議の意義の理解、現状の評価、ニーズの確認)「学校全体で重点化したことが十分にできていない。各々が取り組んでいるが、成果が上がらない。」
課題解決 に向けて 共通理解	課題解決の方法を話し合う。(何ができるか各々の立場をいかした討議)道徳教育推進チームのとして何をすべきか。「来月の「道徳の日」と絡めて全校で取り組もう!各担当からの連携のアイデアを出そう。」
計画 実践	実践できる行動計画を立てる(何を、誰が、いつまでにするのか、他の教職員が動きやすいように整備)道徳主任から職員会議で計画と内容の提案と共通理解を図る。・資料の提示、人材活用、掲示等の工夫

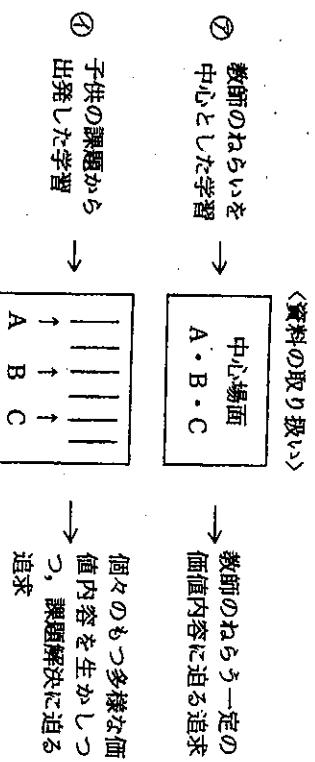
このようなことを通して、学校の全教育活動で取り組む道徳教育推進計画において、個の役割が明確になるのである。そして、教職員一人一人(みんな)が、何をすべきか、何のための実践かを意識して、自校の道徳教育(特徴や重点)について語れる姿をめざしてほしい。共通理解を基盤に共通実践していく過程で、学校に対する何とも言えぬ愛着や誇りも培われていくことと思われる。

道徳教育におけるリーダーシップ 七條・推田編(2016) 美巧社

【参考文献】
植田和也(2015)「教材研究を大切にした一時間一時間の実践と全教職員で取り組む道徳教育」「道徳教育」2月号、明治図書、68-70頁
宮脇充広(2015)「道徳教育推進教師の役割と今後への期待」「未来への扉を開く道徳教育」七條正典他編 美巧社、25-26頁

(3) 個の課題に応じ、多様な取り方を可能にする資料の取り扱い
価値内容の構造的把握で述べたように、中心価値への取り方は個によって多様である。したがって、一つの資料を基に価値を追求するときも、子供一人一人の資料に対する見方や考え方多様になるのは当然である。そこで、個に応じて多様な取り方が可能となる資料の取り扱いの工夫が必要になる。

① 資料の取り扱いの二つのタイプ
資料の取り扱いの二つのタイプとして、下図に示したような、教師のねらいを中心とした学習のタイプと、子供の課題から出発した学習のタイプの二つが考えられる。



②のように、読み物資料の中心場面に絞って、全員の子供の考え方を出させ、教師のねらう方向に深めていくという方法は、ねらいとする一定の価値内容に気づかせ、価値の自覚を図るよう教えようとする色彩が強い授業であろう。子供が気づいていない価値内容について指導する授業としては、有効な方法であると考える。しかし、この方法だけになりがちな現状は、改善を要すると考える。

そこで、④のように一人一人の子供に、それぞれの課題意識から出発して資料の中のいくつかの場面に分けて考えさせる方法は、一人一人の子供の個性を生かし多様な取り方で学ばせようとするものである。

ここでは、特に、個に応じた道徳の授業を進めるために④のようなタイプ



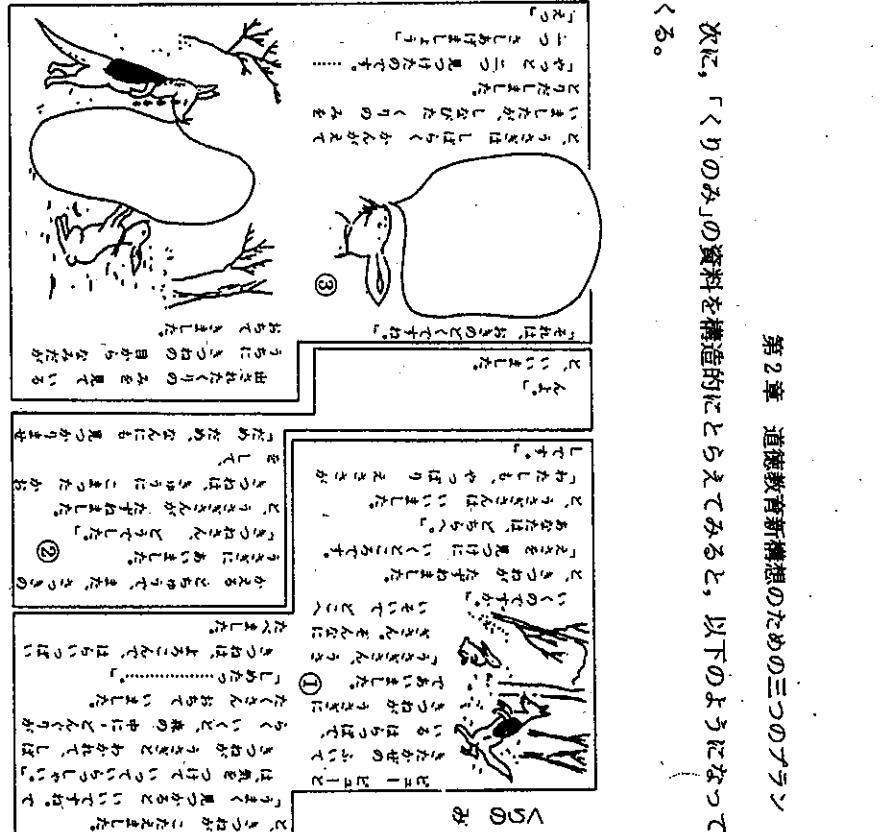
「くりのみ」の資料に描かれた価値内容を追求していくこうとしていることがわかる。

この個の多様な取り方を可能にするためにも、資料の中心場面を一つに絞って、そこだけを全員に考えさせようとするよりも、それぞれの場面でのうきやきつねの心の内面を体験し、掘り下げるところのほうがより「思いやり・親切」の価値内容を自分なりにとらえる学習ができるであろう。

以上のように、資料の取り扱いを変えることで、子供が自分の課題解決に向かって主体的に資料を基に価値内容を深め、学び取っていく学習ができると考えた。

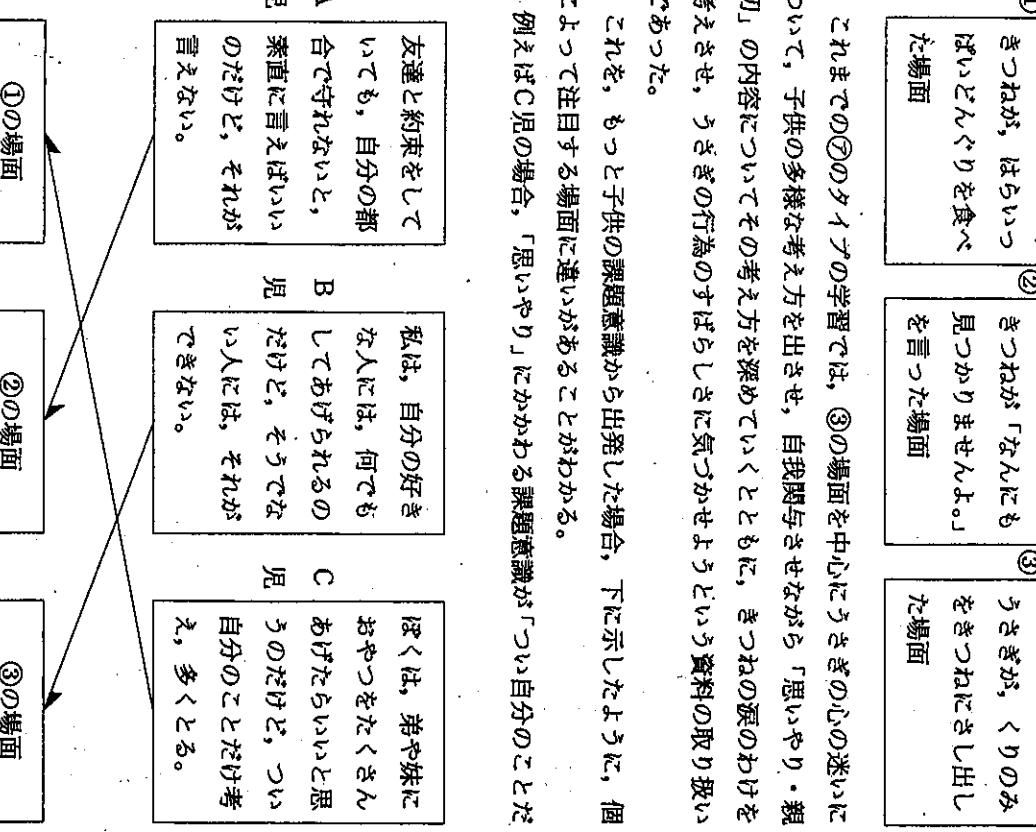
以上述べたことを基に、次に資料分析の観点について述べることにする。

② 構造的にとらえた価値内容を基にした資料分析
先の価値内容の構造的把握でも述べたように、一つの中心価値についていくつかの関連価値が構造的に考えられる。そこで、資料分析について、その構造的に把握された価値内容を基に資料の分析をすると、関連価値を含めて中心価値に迫る資料の構造が明らかになり、資料の取り扱いも明確になるであろう。そこで、第2学年「くりのみ」を例に、「思いやり・親切」の価値内容を構造的にとらえてみることにする。



第2章 道徳教育新構想のための三つのプラン

次に、「くりのみ」の資料を構造的にとらえてみると、以下のようになってくる。



ア 指導内容の明確化（主題の含む価値に関連して）
資料の内容と主題の含む価値内容との関連が明確になる。
資料を考慮しながら、主題の含む価値内容を分析する。

イ 資料活用の明確化（児童の実態に関連して）
指導すべき視点と資料活用の方向が明らかになる。

③ 子供の発達課題や実態を基にした資料選択

② でみた分析の結果を基に、資料選択をしていくわけになるのであるが、選択に当たっては、特に、分析の視点のかかわりから、次の2点が重要なと考える。

ア 子供の課題に即した資料……………発達課題に即した資料
自分のこととして受け止められる資料……………共感できる資料

このような点を十分に検討した上で、資料選択を行う必要があり、適切な資料を活用して、そこに登場する人物の具体的な生き方にふれさせ、ねらいとする価値内容を主体的に自覚できるようにしていきたいものである。

④ 子供の多様な考え方を生かし、個々に深めていくための資料の活用
上記のような視点で、時間をかけて分析・選択した資料も、資料活用の方
法を十分に考慮に入れておかないと、その効果は上がらない。資料のもつ力
を最大限に生かし、子供の多様な見方や考え方を生かし、深めるために次の
ような留意点が挙げられる。

ア 道徳的内容にかかる自らの行為や考え方を振り返り、課題意識をも
てる場の工夫

イ 子供の課題意識につなげるような資料提示の工夫
ウ 資料の中心場面で主人公と共に共感させ、自らの課題意識とつなげて追求

子供が自ら学ぶ道徳的価値観
1/3. 善行の道徳的価値観
本所会議

38

39

ア させる工夫（中心場面をどう設定し、子供の実態に基づいた表現をさせ
るのか。）
エ 資料で学んだことを基に、自分のこれまでの考え方を見つめさせる場
の工夫
オ 日常生活において、さらに次の課題意識へとつなげるような終末の工
夫

この中で特に、ウのことについて述べてみよう。

中心場面においては、子供の生活経験に基づく意識を、資料を通して掘り起こしながらねらいに迫らせていきたい。その際に、ねらいに迫るために子供の考えを引き出すときに、①の分析のところでみたような子供の実態に関するものが出てくるように工夫する必要がある。そのような中心場面の設定の仕方と工夫が大切になる。そうした資料の活用をすることで、子供自らが主体的に学べるようになると見える。

つまり、常に子供の課題意識という点を考慮に入れ、それがうまくつながり、子供一人が自分自身のものとして主体的にかかわっていくけるようなり、子供一人が自分自身のものとして主体的にかかわっていくけるようなり、子供の仕方を工夫していくことが重要なである。

以上、資料分析、資料選択、資料活用の視点について述べてきた。この過程で最も大切なポイントは、教師が指導のねらいを明確にもち、子供の側に立って、教材としての資料を十分吟味することである。そうすることにより資料に含まれる価値内容が、構造的にとらえられるとともに、子供の実態、(発達課題)との関連で押さえられ、授業の中心場面、子供の心情への迫り方、発問、指導過程などの位置づけが明確になってくるのである。

(4) 多様な価値観を互いに深めるための指導の工夫

子供一人が主体的に価値をとらえ、内面化を図っていくためには、展開の段階で出てくる子供たちの多様な価値観をさらに深め、自分のものとしてとらえられるようにしていくことが大切なポイントとなる。

そこで、子供たちの多様な価値観を互いに深めるための指導の工夫について

て、① 話し合いの形態、② 表現活動に分けて述べることとする。

① 話し合いの形態

子供が主体的に価値を追求できる指導方法として、次のような学年の発達段階を踏まえた話し合いの形態の工夫が考えられる。

② 表現活動

子供の多様な価値観を深めていくための有効な指導法として、道徳ノートやカード・吹き出しなどの表現活動が考えられる。「書く」という作業は、「考える」働きをもつ。書きながら思考を働かせ、考えながら書くという繰り返しの中で、自らの価値観を高めていくことができる。また、自我意識の発達に伴って、周りから自分がどうみられているかという対他意識が一層強くなってくる。したがって、これまでの自分になかった友達の価値観にふれることにより、自分を見つめ直し、より高い価値観の確立を目指すダイアログ学習は、有効な指導法である。

③ パス学習

子供が自らの価値観を深めていくための有効な指導法として、道徳ノートやカード・吹き出しなどの表現活動が考えられる。「書く」という作業は、「考える」働きをもつ。書きながら思考を働かせ、考えながら書くという繰り返しの中で、自らの価値観を高めていくことができる。また、自我意識の発達に伴って、周りから自分がどうみられているかという対他意識が一層強くなってくる。したがって、これまでの自分になかった友達の価値観にふれることにより、自分を見つめ直し、より高い価値観の確立を目指すダイアログ学習は、有効な指導法である。

ア 道徳ノート
道徳ノートは、「より高い価値観に照らし合わせて、自分の今までの在り方や生き方を静かに、深く見つめ直す」という道徳性の内面化を図る上で重視すべきではない。特に自己の考え方や感じ方の変容と、人間としての成長を「自己評価」するといふ点は、今後の大きな研究課題である。

ア 道徳ノート
道徳ノートは、「より高い価値観に照らし合わせて、自分の今までの在り方や生き方を静かに、深く見つめ直す」という道徳性の内面化を図る上で重視すべきではない。特に自己の考え方や感じ方の変容と、人間としての成長を「自己評価」するといふ点は、今後の大きな研究課題である。

イ カードや吹き出しの活用

道徳ノートとともに、子供の価値観を深めるための表現活動として、カードや吹き出しの活用を挙げることができる。

a カード学習

中心場面での主人公の行為や気持ちに対する意見や感想、また、自分ならばこうするだらうという考えをカードに書き、それを基に話し合い活動に入る。

その際、カードを黒板にはり、グルーピングしたり、操作したりしながら、話し合い活動を深めていく。その話し合いの過程を通して、友達の立場に気づき、もう一度自分の考えを振り返る中で、価値観が深まっていくのである。

また、カード学習を用いることで、子供の反応を生かした板書を構成することができる利点もある。この方法は、その特性を考えると高学年向きであろう。

b 吹き出し

吹き出しカードは、その1時間でねらう価値内容について多様な考えを引き出すところで使用するのが効果的である。そして、引き出した多様な考え方いくつかに類型化したあと、あらためて自分はどの考えに近いかを確認させ、互いに話し合い交流することで、それぞれの考えを深めていくことができる。

吹き出しは、全年でよく使われるが、役割表現のように主人公の気持ちや考えを登場人物になって表現していくので、短時間で焦点化して書かすことができる。このことを考えると、この方法は特に低学年で効果的であるといえよう。

以上、カードや吹き出しの活用方法について述べてきたが、カードや吹き出しを使って、いかに交流を図り、各自の考え方や感じ方を深めるかという点が大切であり、そのためには日頃より、それらの活動の日常化を図り、学び方を育てておくことが必要である。

42

(5) 子供が自ら学ぶための教師の援助活動

今までの授業中の教師の役割は、どちらかといえば、推進役的な働きが多かったのではないだろうか。つまり、授業を構成する主体は、どちらかといえば、教師であり、子供は受身的な学習に終わりがちであったようと思う。

「子供が自ら学ぶ道徳教育」を考えるとき、これまでの教師の授業の在り方を見直す必要がある。つまり、学習の主体者は子供であり、そのために教師は子供の学びを援助するという姿勢を大切にしなければならないと考える。

子供一人一人は自らの課題を主体的に追求する。教師は子供が自らの課題をもてるように、また主体的に追求できるよう心がけたいものである。

そして、子供一人一人を援助していくためには、これまで以上に、十分な児童理解することである。教師は日頃から子供たちの考え方や行為の実態を把握し、受容的・共感的態度でそれを受け止めるよう心がけたいものである。

このような教師の姿勢は一人一人の個に応じる指導を可能にする基本である。しかも、一人一人の子供を肯定的にみることを忘れてはならない。

では、教師は子供の実態を把握した上で、個が主体的に価値内容を追求し学び取っていくために、どのような援助の視点に立てばよいのだろうか。一人一人の個が、主体的に自分の考えを深められるための教師の援助の視点と主な援助の場とのつながりをまとめたのが、下図18である。

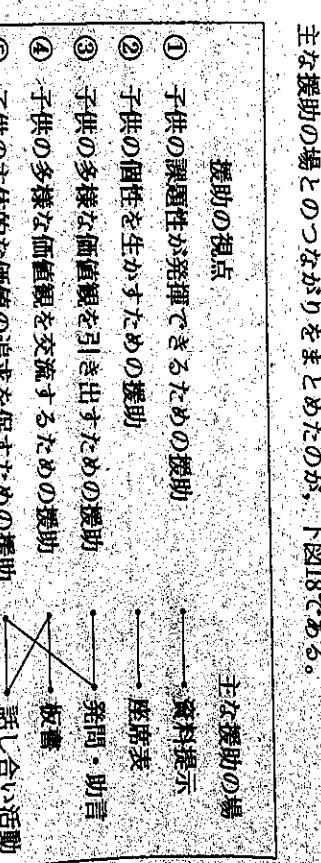


図18 教師の援助の視点と主な援助の場とのつながり

43

第6学年 道徳学習指導案

指導者 植田 和也（香川大学）

1 日時 平成28年 月 日()

2 主題名 自律と責任が伴った自由

3 教材名 うばわれた自由（私たちの道徳） 1-(3) 自由、自立・責任

4 ねらい ガリューの言う「本当の自由」について考えることを通して、自由と規律ある行動の意義を理解し、自他の自由を尊重しようとする心情を育てる。

5 主題設定の理由

(1) 本主題でねらう内容項目は1-(3)「自由を大切にし、自律的で責任のある行動をする。」である。自分自身を高めていくためには、自由な考え方や行動も大切であるが、その自由は放縱とは区別されなければならない。自由のとらえ違いをして自分勝手な行為や周囲に迷惑となることにならないように自分自身を律することが求められる。最高学年の児童には、自由な考え方や行動のもつ意味、さらに、それに伴う自分の責任を踏まえた自律的な行動について意識をもたせることができると考え、本主題を設定した。

本主題、「自律と責任が伴った自由」は、いくら時代や社会が変化しようと、人間が周囲の人と共に集団を形成し協力して生きていこう上で基盤となる重要な考え方であると考える。高学年の児童は、自律的な態度が発達し、責任感が育ち、批判力もついてきている。従って規律を伴った自由の大切さを感じ取る素地は十分にできていると考えられる。また、関連する内容項目として、ガリューの言動やジェラールの行為等から、4-(1)公徳心、法・規則の尊重、権利義務や4-(2)公正公平、正義も考えられる。

(2) 本学級の児童22名に以下の2点についてアンケート調査を実施した。

- ①「自由」という言葉を聞いて、どんなことをイメージしますか。（複数回答）
 ・自分勝手（勝手に楽しくする）（勝手にやる）（生きていくように生きる）：4人
 ・何でもしていい、できる。：3人
 ・やりたいことができる（好きなことを好きなだけ）：3人

それ以外にも、「自分の世界、怒られない、不自由なく生きる、行きたい場所に行く事ができる、法律、制限がない」他があげられた。

- ②毎日の生活の中で、○○が自由であればよいのになあと思うのは、どんな場面ですか。
 ・ゲームする時間：4人 ・宿題：2人 それ以外にも、「テレビの時間、宿題なし、野球、遊びの時間」他があげられた。

上記のような児童の意識は、多くの児童に見られることであろう。このような意識が誰にもあることを踏まえて、ジェラール王子の言動にも共感できるようになしたいと考える。さらに、時間があれば、終末では事前のイメージ等と比較することも踏まえて自己をみつめる学習活動につなげたい。

- (3) 本資料は、主に森でのやりとりの前半と牢屋での後半の場面に分かれている。思いのままに行動することが自由だと考えているジェラール王子が、その考え方の誤りを森の番人に諭されるが聞き入れず、捕らえてしまう前半の場面。その後、ジェラール王自身も、国内の乱れがもとで囚われの身となり、改めて本当の自由の大切さについて考えるという後半の場面である。牢屋に入れられたジュラールと

ガリューのやりとりを通して、自由の大切さと規律ある行動の意義について考えることのできる資料である。

(4) 指導にあたって

「導入」の段階では、自由という言葉からのイメージしたことを見ることにより、自由に対する問題意識をもって、本時でねらいとする価値についての見通しをもたせたい。

「展開」の段階では、ジェラールの気持ちの変化を考えさせながら自由と規律・責任のバランスの大切さ、本当の自由の意味を考えさせたい。グループでの話し合いの時間も確保して、「本当の自由」について多様な考えに触れて考える時間を取りたい。

また、人間のもつ弱さから、ジェラールの言動は他人事ではなく、誰にも起こりうることである点についても触れておきたい。他人事としてではなく、主人公の人物像を通して、自分を見つめるとともに、最高学年として自由な考え方や行動のもつ意味とそれに伴う責任を踏まえた自律的な行動についてしっかりと考へる時間としたい。その際に、「本当の自由」と言うガリューが繰り返しジェラールに伝えた言葉を手がかりに、問い合わせの發問を交えながら、追求したい。ただし、一方的な教え込みとならないように配慮したい。そのため、自律や責任について十分でない場合は、事後の指導でも掲示や私たちの道徳(p.32-33)を活用していきたい。

6 本時の学習指導

(1) 学習指導過程

学習活動	主な発問と予想される児童の反応	指導上の留意点(支援と配慮)
1 自由についての抱いているイメージを確認する。	<ul style="list-style-type: none"> ・何でもしてよい、やりたいことができる。好きなことを好きなだけ。 ・自由なら…ゲーム、テレビ、宿題等 	<ul style="list-style-type: none"> ・事前に書いた自由のイメージや願いについて全体の傾向を示す。
2 資料を読んで話し合う。 (1) 注意するガリューについて (2) ガリューに忠告された時の王子について	<ul style="list-style-type: none"> ・森のきまりがあるんだ。 ・なぜ、ガリューはそこまで…。 ○ガリューは相手が王子なのにどうして、そこまで厳しく言うのか。 ・王子だから決まりを守らなくてよいことは絶対にないと…。 ・王子だからこそみんなの手本になってほしい。 ○ガリューに忠告された時、王子はどのようなことを思ったのか。 ・俺は王子だ、関係ない。 ・うるさいな、無礼なやつだ。 ・王子だから何をしても自由だ…。 	<ul style="list-style-type: none"> ・立ち止まり読みで、状況の共通理解や王子とガリューに共感できるようにする。 ・王子とガリューの言う自由に違いがあることにも気付かせたい。そこで、会話の背景にある考え方の違いを簡単に整理し対比する。 ・ガリューの言葉を手がかりにジェラールの心情について自分で考え、その後グループで共有するように助言する。

<p>(3)牛屋で涙を流した ジェラールの心の 変容について</p> <p>(4)ガリューが森や牛 屋で繰り返し言う 「本当の自由」に ついて</p> <p>3 生活経験をふり返 り、考えたことをま とめる。</p>	<p>（問い直し）</p> <ul style="list-style-type: none"> 自分勝手すぎたのか…。 ガリューの言うことに早く気がつけばよかったのに…。 ガリューの言う本当の自由について真剣に考えていれば…。 <ul style="list-style-type: none"> 周囲の人に迷惑をかけないで自由に振る舞うこと。 人の自由を妨げず、他人や自分のことも考えてすること。 自分がけの自由や自分勝手ではなく、みんなも嫌な思いをしないこと。 （極端な観念的な意見等には）○決まりを守るだけなら、それは自由とは言えるかな。 今までの自分を振り返りながら、今日学んだこと、自由について考えたことをまとめましょう。 	<p>・ジェラールの気持ちだけでなく、自由の捉え方に変化があることに気付かせたい。 ・考えにくい児童には、自由を大切に生きていくために、どんなことが大切だろうかと、助言する。</p> <p>・自分の考えを短冊に書かせた後、黒板上でよく似た考えによる仲間分けを行い全体の考えが視覚的に把握できるように配慮する。 もし、規則尊重や責任論のみを主張するような際には、自由とのバランスにも気付かせたい。その際は心情円盤を活用し、自由と規律の割合を考えるヒントとする。 ・時間があれば、この後のジェラールの生き方について想像する。</p>
--	---	--

(3)評価 「本当の自由」について考えることを通して、自由と規律ある行動の意義を理解し、自他の自由を尊重しようとする心情をもつことができたか。

第4章 道徳教育の充実に向けた推進体制や研修の在り方

III 校内の活性化を図る多様な研修の在り方

道徳科の授業は、道徳教育の要である。その授業づくりについての研修を活性化させることは、道徳教育の充実につながるものである。ここでは、付箋を活用した全員参加型の授業づくりを紹介する。

1 指導案検討の意義

【一人一人が意見を出す】

指導案には授業者の思いや願いがあふれている。だからこそ、下のような指導案検討の意義を教員間で共通理解し、授業者に対してためらなく意見を述べられるような雰囲気づくりを大切にしたい。

【代案を出す】

吟味する対象は人ではなく論であり、授業を批判することは、授業者にとっても難となります。代案を示し、よりよい授業づくりの素材を提供することで、討議に深まりが生まれます。

【根拠を基に、印象ではなく具体で話る】

根拠のより所を明確に示し、具体的に話すことは、全ての参加者にとって分かりやすい議論となり、授業研究を促進します。

2 指導案検討

指導案検討の際には、意見を書いた付箋を、右のような拡大印刷した指導案に添付していく。そうすることで、指導案検討の司会者は多くの意見が集まつた部分に焦点化して討議を

道徳教育における
「二グーグルア」「2016
七條・オモト編 差添注」
Ⅲ 校内の活性化を図る多様な研修の在り方
進めたり、授業者は時間内に検討できなかつた意見についても後で検討したりできるのである。その際、意見の種類によって付箋の色を変えたり、授業者に直接質問して確認すれば分かる内容の付箋は貼らないようにしたりするなど、時間短縮の工夫も考えられる。また、学級に関わる専科教員の意見もも表出されやすく、全員が討議に参加できるようさがある。

3 指導案検討の流れ

<指導案検討開始まで>
司会者…拡大指導案を貼る。
参観者…付箋に意見を書き、拡大指導案に貼る。指導案を事前に配布すれば、参観者は意見を準備して指導案検討に参加できるので、より時間短縮となる。質問があれば、授業者に直接質問して確認しておく。

<指導案検討の開始から中盤では>
司会者…付箋を基に、拡大指導案上の意見が集中している部分に論点を焦点化する。次のように代案を求めたり、授業者に確認したりすることが、よりよい授業づくりにつながる。

「この手立てが有効ではないという意見は分かりました。では、先生なら、どのような手立てを講じますか。」「～代案が出されましたら、授業者はこの代案についてどう思いますか。」「～代案が出されましたら述べたり、一文一義で述べたりする、抽象的なことばを避け、具体的なことばで語ることで、短時間で深い検討を行う。」

<指導案検討の終末では>

司会者…研究授業のポイントとなる場面を示し、参観の視点を確認する。「今日の検討では、～についての意見がたくさん出されました。研究授業では、このことを中心に授業を参観して下さい。」
このような討議を経て完成した指導案は、教員全員が創り上げた指導案である。授業者と参観者が一体となつた研究授業が期待できるだろう。

4 研究授業において 授業後の討議において

授業後の討議において、より活発な話し合いが行われるようにするために